総評　2020.7月分　杉本真維子

「子が描く私は／いつも三つ目」
ほほえましくも、深遠。世界を認識しはじめたばかりの子どもにとって、親とは生まれて初めて出会う他者であり、世界そのものなのでしょう。新鮮で驚きに満ちていて、よくわからなくて、ちょっとコワくて、なるほど、三つ目の妖怪みたいな感じかもしれないですね。
「あんみつの寒天ぱっと歯に割れる」
寒天の透明感が美しく、夏日を際立たせます。硬い歯にぱっとくずれる寒天の割れ目から新しい未来がのぞくようです。
「馬は見たことがないが／馬小屋がある実家」
馬のいない馬小屋という空間が湛えるものの豊穣さ。〝不在〟という事実がかえって鮮烈に刻印する家族の歴史があると思います。
「地下鉄に髪をなびかせ／人間の満ち引きが生む／まぼろしの海」
俳句的な作品が多いなか、これは現代詩的という感じがします。じゃあ現代詩的って何と問われると難しいのですが――改行の力（切断と接続）、および、見えている現実の部分だけでなく、それと不可分に張りついている幻も掴みとっているところ、とまずは言っておきたいと思います。
そのほかの佳作は以下のとおりです。
「浮き沈みは妖精の仕業／いたずらが過ぎて／小さな涙の池が／できちゃった」「読みさしの／文庫本の頁伏せられ／蝶のような／つなぎめになる」「太鼓でもあり鈴でもある／タンバリンは／愉快な楽器なことだなあ」「暗い戸棚から羊が私を見ている」「生まれてしまったから生きる生に／意義は気休めであるように／私の母ではない海」「布団敷く／しくしく泣く／泣く泣く死す／キミシス」「狂ったらクララに任す七夕は」「サヨナラの香りがする／木のベンチ」「かつて存在していました／蛍光灯のカサのうえ／眠るあなたの胸のおく」